

藤坂馬場遺跡

篠山市

藤坂馬場遺跡

— 一般県道本郷藤坂線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

兵庫県文化財調査報告

第446冊

兵庫県教育委員会

平成 25(2013)年 3 月

兵庫県教育委員会

篠山市

藤坂馬場遺跡

— 一般県道本郷藤坂線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成 25(2013)年 3 月

兵庫県教育委員会



調査地遠景（東上空から）



調査地遠景（西上空から）



調査区全景（東上空から）



調査区全景（西上空から）

例 言

- 1 本書は、篠山市藤坂地内に所在する藤坂馬場遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、一般県道本郷藤坂線道路改良事業に伴うもので、兵庫県丹波県民局柏原土木事務所（当時）の依頼に基づき、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。また、出土品整理は、兵庫県丹波県民局丹波土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を主体として、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部が実施した。
- 3 調査の推移
（発掘作業）
確認調査 平成 16 年 1 月 6 日
実施機関：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
本発掘調査 平成 16 年 7 月 7 日～平成 16 年 8 月 10 日
実施機関：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
工事請負：三共建設株式会社
空中写真測量委託：株式会社河南測量設計
（出土品整理作業）
平成 24 年 4 月 1 日～平成 25 年 3 月 31 日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
遺物写真撮影委託：株式会社 タニグチフォト
- 4 本書の編集・執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 深江英憲が担当した。
- 5 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。
- 6 本書に使用した方位は、国土座標（第Ⅴ系）の座標北を示す。また、標高値は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。（世界測地系に換算）

本文目次

第1章 調査の経緯と経過	(深江英憲) 1
第1節 調査に至る経過	
第2節 調査の概要	
第3節 整理作業	
第2章 遺跡の位置と環境	(深江) 4
第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡	
第3章 発掘調査の成果	(深江) 6
第1節 概要	
第2節 遺構	
第3節 遺物	
第4章 まとめ	(深江) 9

挿図目次

図1 調査区位置図	2
図2 藤坂馬場遺跡と周辺の主な遺跡	5

表目次

表1 出土遺物観察表	10
------------------	----

巻頭写真図版目次

巻頭写真図版 1	調査地遠景（東上空から）	巻頭図版写真 2	調査区全景（東上空から）
	調査地遠景（西上空から）		調査区全景（西上空から）

図版目次

図版 1	遺構平面図	図版 6	SX01・SD01平面図・断面図
図版 2	調査区南壁断面図	図版 7	出土土器
図版 3	P15・P33・P53平面図・断面図	図版 8	出土石器
図版 4	SK01平面図・断面図		
図版 5	SK02平面図・断面図		

写真図版目次

写真図版 1	調査前状況（西から） 機械掘削状況（東から） 作業状況① 作業状況② 調査区全景（西から）	写真図版 9	出土土器①
写真図版 2	調査区全景（東から） 調査区西半部柱穴群（東から）	写真図版10	出土土器② 出土土器③
写真図版 3	調査区南壁断面（北西から） P15遺物出土状況（北から） P15断面（北から） P33遺物出土状況（北から）	写真図版11	出土土器④ 出土土器⑤
写真図版 4	P53遺物出土状況（東から） P53断ち割り断面（南から） 上：SK02（北から） 左：SK02遺物出土状況（北から）	写真図版12	出土石器① 出土鉄滓①
写真図版 5	SK01（南から） SK01（北から）		
写真図版 6	左：SD01畦（C-C'）断面（南から） SX01北溝 炭検出状況（東から） SX01北溝南畦断面（南から） SX01北溝北畦（B-B'）断面（南から）		
写真図版 7	SX01畦（A-A'）断面（北から） SX01（北から）		
写真図版 8	地元説明会状況（2004年8月3日）		

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経過

藤坂馬場遺跡は、篠山市藤坂地内に所在する。当該地は、兵庫県丹波県民局柏原土木事務所（篠山土木事務所）（当時）が計画を進めている一般県道本郷藤坂線道路改良事業に伴い、平成6年度に分布調査（遺跡調査番号：940064）を実施したところ、事業路線内の一部において、新たな埋蔵文化財包蔵地の存在が明らかとなった。その後、事業の進捗に伴い、平成15年度実施の確認調査（遺跡調査番号：2003235）において遺構を検出した（1T他）等の調査結果に基づいて、遺跡の残存する範囲が明らかとなり、本発掘調査範囲が確定した。

当該事業は、本線道路部分の周辺工事が既に進み、当該本発掘調査箇所も本体工事の為に厚く盛土された状況の中、早急の発掘調査実施が必要だったため、兵庫県丹波県民局長からの平成16年5月13日付け丹波（柏土）第1096号の依頼に基づき、本発掘調査（遺跡調査番号：2004166）を実施した。

分布調査及び確認調査、本発掘調査の体制は、以下の通りである。

1 分布調査（遺跡調査番号：940064）

調査主体：兵庫県教育委員会

調査担当者：兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所

調査第3班 主査 渡辺 昇

技術職員 池田征弘

技術職員 松岡千寿

調査期間：平成6年4月14日

調査面積：50,000㎡

2 確認調査（遺跡調査番号：2003235）

調査主体：兵庫県教育委員会

調査担当者：兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所

企画調整班 主査 深井明比古

調査期間：平成16年1月6日

調査面積：28㎡

3 本発掘調査（遺跡調査番号：2004166）

調査主体：兵庫県教育委員会

調査担当者：兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所

調査第2班 主査 深江英憲

主任 池田征弘

調査期間：平成16年7月7日～平成16年8月10日

調査面積：246㎡

第2節 調査の概要

藤坂馬場遺跡の所在する篠山市藤坂は、篠山市の北東部に位置し、篠山川の支流である藤坂川によって開析された谷筋に沿っている。この谷筋は藤坂付近で東西方向に折れ曲がり、調査地は谷の南側に広がる丘陵の裾部にあたる。

調査地は、前述の通り、道路本体工事による厚い盛土がされていたため、調査は先ずその厚い盛土を機械掘削によって除去する事から始まった。盛土の除去後、本来耕作地であった当該箇所内の耕土等を更に機械掘削によって除去し、包含層を人力によって掘削した後、遺構検出面において精査、遺構検出、遺構掘削を行った。

調査区の東北部は、耕作地造成により、本来遺構検出面であった部分が一段低くなっており、削平等の影響により明瞭な遺構は検出できなかった。従って、遺構が検出できたのは、この段より西側の一段高くなった部分であって、柱穴と考えられるピット、土坑、池状遺構と考えられる不定形土坑を検出した。

出土遺物ではピットより、12世紀代以降と考えられる土師器皿・椀等が出土し、土坑より土師器鍋・瓦器椀、池状遺構より瓦器椀・須恵器鉢・土師器鍋・輸入陶磁器等14世紀代を中心とした時期の遺物が出土している。また、確認調査の1T掘削時に池状遺構内を掘削した際に、瓦質羽釜が出土しており、同遺構に伴うものと考えられる。その他、楔形石器や叩き石等の縄文時代のものと考えられる遺物や鉄滓等も出土しているが、楔形石器と鉄滓は包含層掘削時の出土であり、叩き石はピット（P12）出土ながら同遺構に伴わないため、何れも混入遺物と考えられる。従って、本調査では、同時期の遺構、遺物は検出できていないが、当該地周辺に関連遺跡が存在する可能性が高い。

当該調査は、調査箇所道路本線の片側1車線を塞ぎ、掘削土搬出のため2tトラックにより往復す

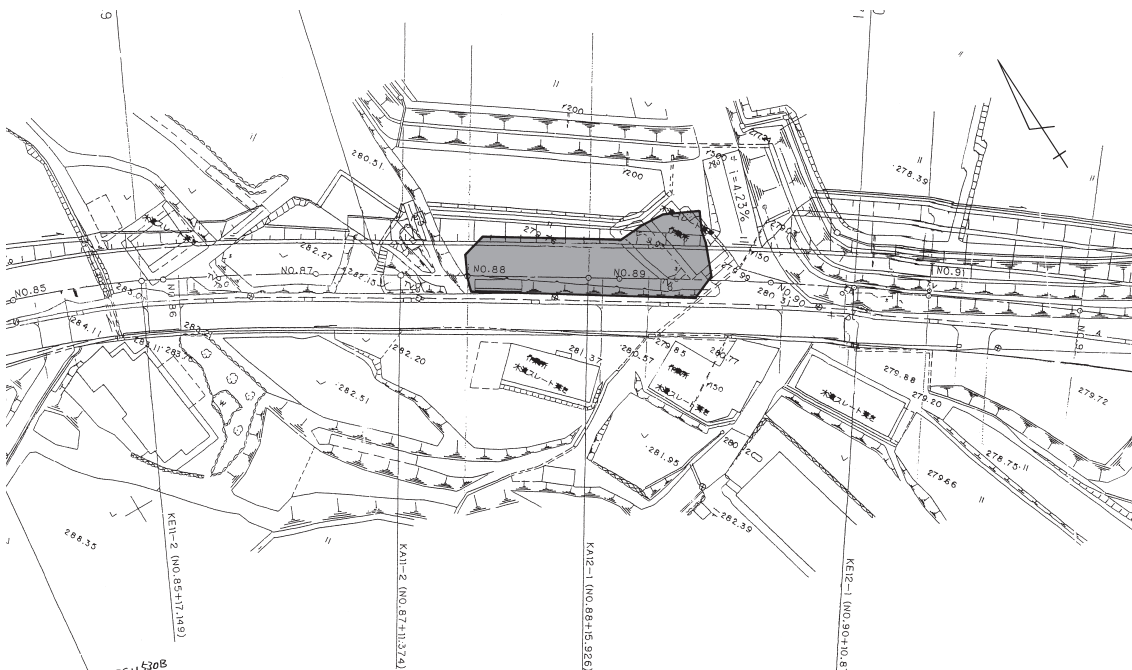


図1 調査区位置図（1／1,000）

る等、藤坂峠を往来する車両等に配慮しながらの調査だったが、地元住民の理解、協力もあり、特に問題もなく調査を進められた。また、調査の佳境を迎えた8月3日（火曜日）には地元説明会を実施し、地元住民約30名の方々に参加いただき、同月10日（火曜日）に調査を終了した。

第3節 整理作業

当該事業に伴う出土品整理作業は、平成24年度の単年度で実施した。

作業は、水洗い、ネーミング、接合補強、遺物実測、復元、遺物写真撮影、写真整理、図面補正、トレース、レイアウト、報告書印刷・刊行である。

整理作業に係る、体制等は以下の通りである。

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

整理保存課 副課長 篠宮 正（工程管理）

非常勤嘱託職員（水洗い・ネーミング） 今村 直子 小野 潤子 藤尾 裕子

前田 恵梨子

（接合補強・復元） 荻野 麻衣 菅生 真理子 吉田 優子

（遺物実測・図面補正・トレース・レイアウト・写真整理等） 佐伯 純子

栗原 美緒

（情報処理等） 古谷 章子 有田 遥香 坂東 知奈

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

篠山市藤坂は、篠山市の北東隅に位置し、篠山川の支流である藤坂川流域に立地する。中世における藤坂庄は、この一帯に比定されており、南北朝とされる九条家代々御隨身御恩事（九条家文書）において、元亨年間（1321-1324）、左番長秦久光に「丹波国 藤坂庄 但辞歟」との注記があり、当庄が久光に一時給与されていたとされる。

藤坂馬場遺跡は、平成6年度の分布調査において新規で発見された埋蔵文化財である。遺跡の内容については、次章に後述するが、概ね鎌倉時代以降を中心とする中世の遺構及び遺物が検出されている。周辺の周知の埋蔵文化財についても、当該時期の遺跡が確認されており、その分布は藤坂馬場遺跡を中心とした、山裾部と丘陵上の一部に認められる。

藤坂遺跡（2）は、藤坂川を挟んで、藤坂馬場遺跡の北側の対岸、山裾部分に広がる遺物散布地である。遺物は、中国製陶磁器、瓦器、土師器等が採集されており、出土遺物の内容から、藤坂馬場遺跡との共通性が認められる。白藤城跡（3）は、藤坂遺跡北側の丘陵上に位置する。新田氏の支族である脇屋尾張守義治が明徳の乱の頃にこの地に移り住み、4代目右京之進義貢が中馬と改氏して館を造成し、元亀元年（1570）に越前守治秀により築城された。主郭は、山上18m×9mの半楕円形の平坦面で、主郭の西側に幅2mの帯曲輪があり、その更に西側に18m×10mの曲輪があり、西面に堀切がある。また、その西南尾根上に2箇所平坦地がある。城の南麓には、中馬氏やその家臣団が居住していたとされる。居館の規模は東西約155m、南北約64mで、南と西に土塁を築いていたが、現在館跡は消失し、土塁と堀の一部が残存するのみである。菩提寺である長谷寺には、中馬氏の祖脇屋義治の位牌が祀られているという。真如寺跡（4）は、藤坂馬場遺跡から西へ約1300mの峠道（県道本郷藤坂線）沿いの山麓に位置する。中馬氏の家臣団で北条家時の子孫と言われる上村氏が建立したとされ、現在は約50m×20mの平坦地を残す。寺跡内にある国指定重要文化財で山名氏が寄進したとされる妙見堂は、残存する応永6年（1399）の大般若経奉読板から、室町初期から中期の建立とされるが、文禄年間に真如寺が廃寺となって以降、長谷寺の所轄になったと言われる。八ヶ尾山城（41）は、藤坂馬場遺跡から南東へ約1200mの八ヶ尾山山頂に位置する。天正5年（1577）に明智光秀が丹波経略に当たって、この地域の土豪、須知、山内、大芋等の一族に命じて、井尻信濃等を奉行として築造させた出城で、北側周辺に荒木対馬、奥村穀右衛門、太田備中等が館を構えた。この地域は、多紀郡北部の交通の要衝であり、藤坂からの登り道を牛打谷と称して、南東は小原、西は畑山を通じて多紀連山に続いている。城跡は、東西南の三方を岩場としていて、唯一北側からの登りが可能である。山頂の平坦地は約13m×13mを測る主郭となし、それより北北東にかけて階段状に9段の平坦地をなしている。9段目の平坦地から南東へ約1町で杉ヶ谷に出て、そこには清水が湧いているという。以上、藤坂馬場遺跡と周辺の遺跡について記述した。周辺の山上、丘陵上に築造された山城については、当該遺跡が営まれた時期よりも後出するものだが、藤坂峠を中心とする東西の往来、また東側で分岐して北東の板坂峠を越えれば、福知山に通じるこの地は、古より交通の要衝であった事が言えよう。

参考文献

- ・「兵庫県地名 篠山市」『日本歴史地名体系 第29巻Ⅰ』 1999年 株式会社 平凡社
- ・「旧大芋村」『多紀郡郷土史考（下巻）』 1958年 奥田楽々齋著 多紀郡郷土史考刊行会
- ・「第1部 第1章 中世城館調査報告 Ⅱ丹波地区〈多紀郡篠山町〉」
『兵庫県の中世城館・荘園遺跡－兵庫県中世城館・荘園遺跡緊急調査報告－』 1982年 兵庫県教育委員会



- | | | |
|-----------|--------------|------------|
| 1 藤坂馬場遺跡 | 15 三の宮4号墳 | 29 大百合1号墳 |
| 2 藤坂遺跡 | 16 大芋中一ノ宮遺跡 | 30 大百合2号墳 |
| 3 白藤城跡 | 17 大芋中堀ノ内散布地 | 31 大百合3号墳 |
| 4 真如寺跡 | 18 大芋中安ノ上遺跡 | 32 大百合4号墳 |
| 5 山上城跡 | 19 大芋中ユリ遺跡 | 33 大百合5号墳 |
| 6 一の宮1号墳 | 20 福井城跡 | 34 エガ谷古墳 |
| 7 一の宮2号墳 | 21 福井四の宮1号墳 | 35 下笹見遺跡 |
| 8 一の宮3号墳 | 22 福井四の宮2号墳 | 36 宮ノ谷館跡 |
| 9 一の宮4号墳 | 23 福井館跡 | 37 宮ノ谷1号墳 |
| 10 一の宮5号墳 | 24 浄滝寺跡 | 38 宮ノ谷2号墳 |
| 11 一の宮6号墳 | 25 坂本古墳 | 39 宮ノ谷3号墳 |
| 12 三の宮1号墳 | 26 坂本山上古墳 | 40 下笹見北部遺跡 |
| 13 三の宮2号墳 | 27 豊林寺旧跡 | 41 八ヶ尾山城跡 |
| 14 三の宮3号墳 | 28 豊林寺城跡 | 42 菊塚遺跡 |

図2 藤坂馬場遺跡と周辺の主な遺跡

第3章 発掘調査の成果

第1節 概要

調査区は、前述の通り、北東側を耕作地の造成により、遺構検出面が削平されており、段に平行する段落ち溝や鋤溝と思われる小溝、ピット状の落ち込みが認められたが、遺跡の時期を反映する遺構、遺物は検出できなかった。

当該調査において検出した遺構は、遺構内より遺物が出土したピットが57基、土坑2基、池状遺構と考えられる不定形土坑1基とそれに付設する溝1基である。検出遺構の内、多数を占めるピット群については、東西南北の方位をほぼ同じくする列状を成しているが、調査区が狭小であることから、明確に建物跡を復元するには至らなかった。

本報告書においては、基本的に出土遺物が図化できた遺構、及び当該遺跡を特徴付ける性格の遺構について、遺物等の出土状況があるものについては図版、写真図版を掲載する事とし、それ以外で図化遺物がある遺構については、遺構平面図（図版1）に遺構番号のみ掲載している。なお、遺構番号は、発掘調査時と本報告書との混乱を避けるために、調査段階のままで呼称する。

第2節 遺構

1 ピット（図版1・3 写真図版3・4）

ピットは、遺物の出土状況等について、P15・P33・P53の図版を掲載している。また、出土遺物を掲載しているピットは、P09・P12・P13・P18・P20～P22・P27・P32・P33・P37・P40・P53・P57である。

P09は、調査区中央寄り北側、SK02の東側に位置する。出土遺物では、土師器碗（3）、瓦器碗（4）を図化している。

P12は、調査区中央寄り南側に位置する。出土遺物では、瓦器碗（5）、叩き石（S2）を図化している。

P13は、調査区中央寄りやや南側に位置する。出土遺物では、瓦器碗（6）を図化している。

P15は、調査区西寄りやや南よりに位置している。直径約30cmを図るやや東側に張り出した不定円形を呈し、検出深度は約11cmである。土師器皿（7）を図化した他、土師器片や礫が混入している。

P18は、調査区西寄りやや北側に位置する。出土遺物では、土師器碗（8）を図化している。

P20は、調査区西寄り中央側に位置する。出土遺物では、瓦器碗（9）、須恵器鍋（10）を図化している。

P21は、調査区西寄りやや南側に位置し、P22に接する、或いは切り合い関係にある。出土遺物では、土師器皿（11）を図化している。

P22は、調査区西寄りやや南側に位置し、P21に接する、或いは切り合い関係にある。出土遺物では、土師器皿（12）、須恵器皿（13）を図化している。

P27は、調査区西寄りやや北側に位置する。出土遺物では、瓦器碗（14）を図化している。

P32は、調査区西寄り南側溝内に位置する。出土遺物では、瓦器碗（15）を図化している。

P33は、調査区西寄り南調査区壁際に位置する。南側溝において北半部を検出した。東西径約30cmを図る不定円形を呈し、検出深度は約21cmである。出土遺物では、土師器皿（16）を図化している。

P37は、調査区西寄り中央側に位置する。出土遺物では、瓦器碗（17）を図化している。

P40は、調査区西寄り中央側に位置する。出土遺物では、土師器鍋（18）を図化している。

P53は、調査区西寄り中央側に位置する。東西径約25cmを図るやや達磨様の不定円形を呈し、検出深度は約20cmである。出土遺物では、土師器碗（19）を図化している。

P55は、調査区西寄り南側に位置する。出土遺物では、土師器杯（20）を図化している。

P57は、調査区中央寄り南側に位置する。出土遺物では、瓦器碗（21）を図化している。

2 土坑（図版1・4・5 写真図版4・5）

土坑は、SK01・SK02の2基を検出し、検出状況等の図版を掲載している。

SK01は、調査区中央寄りやや北側に位置し、SX01の西側に隣接する。長軸約140cm×短軸80cmを図る不定な隅丸長形状を呈し、検出深度は約10cmと浅い土坑である。土坑内には、約10cm～25cm角の礫が敷き詰められており、礫は全体を通して被熱を受けた部分が認められる。出土遺物は図化には至っていないが、土師器鍋等が出土している。骨片等が認められないが、火葬墓の可能性も考えられる。

SK02は、調査区中央より北側に位置する。土坑は、南側に直径約70cmを図る隅丸三角形の不定円形を呈する、検出深度約28cmの比較的深い土坑と、北側に直径約42cmを図る円形を呈する、検出深度約6cmの極浅い土坑から成る。南側の土坑内には、約10cm～20cm角の礫が投棄されており、西側の掘り方付近で出土した瓦器碗（22）を図化している。

3 池状遺構（図版1・6 写真図版6・7）

池状遺構（SX01）は、調査区中央寄り、東側の段の直ぐ西側に位置する。東西長約450cm、南北長400cm超の不定円形を呈し、検出深度は20cmである。遺構の北西側には排水溝と考えられる幅約40cm～60cm、検出深度約15cmの溝が取り付け、北東側の幅約40cm、検出深度約7cmを図る溝（SD01）についても、同様の機能を有するものと考えられる。遺構の南側は調査区外に伸びており、全体の規模は不明だが、南側の丘陵部からの流水を溜めておき、一定量を北側へ流していたものと考えられる。出土遺物では、須恵器鉢（23）、須恵器鍋（24）、瓦器碗（25）、青磁碗（26）を図化している。また、確認トレンチ（1T）で出土の瓦質羽釜（1）、瓦質鉢（2）は、遺構と1Tの位置関係から、同遺構の出土と考えられる。

第3節 遺物

1 土器（図版7 写真図版9～11）

1は、瓦質土器羽釜の口縁部である。やや内湾しながら立ち上がる口縁部下外面に短い鏢を有す。

2は、瓦質土器鉢の口縁部であるが、僅かに外側に屈曲した口縁部外面には焼成後に剥がれた様な帯状の痕跡があることから、羽釜の可能性が考えられる。

3は、土師器碗の口縁部である。緩やかに開きながら立ち上がる体部に、やや外反する口縁部を持つ。体部内面には指頭圧痕が残る。

4は、瓦器碗の底部である。やや丸味のある底部に低い断面「コ」字状の高台を付す。

5は、瓦器碗の底部である。丸味のある体部にやや外反する細身の高台を付す。

6は、瓦器碗の口縁部である。やや内湾気味に立ち上がる体部に細く丸味を持つ口縁部を持つ。体部内面には指頭圧痕が残る。

7は、土師器小皿である。僅かに丸味を持つ平底から短く開く口縁部を持つ。底部付近内面には、指

頭圧痕が残る。

8は、土師器碗の底部である。僅かに丸味のある体部に断面三角形状の細身の高台を付す。

9は、瓦器碗の口縁部である。やや直線的に開く体部に、端部外側に面を持つ口縁部を持つ。端部外面には更に沈線状の凹みを有す。

10は、須恵器鍋の上部である。丸味を持った肩部から緩やかな「く」字状の屈曲から直線的に短く開く口縁部を持つ。口縁端部は外面に張り出しを持つ。体部外面は横方向のタタキで仕上げ、内面には指頭圧痕が残る。

11は、土師器小皿である。僅かに丸味を持つ平底から短く開く口縁部を持つ。

12は、土師器皿である。底部が僅かに凹みを持つ平底から低く立ち上がる体部を呈する。口縁端部は細身に収める。体部外内面には指頭圧痕が残る。

13は、須恵器小皿である。極低い立ち上がりの体部を呈し、口縁端部は丸く収める。

14は、瓦器碗である。緩やかに開く体部に僅かに屈曲して外面に面を持つ口縁部を持つ。口縁端部は細身に収める。また、内面には暗紋が認められる。

15は、瓦器碗の底部である。僅かに丸味のある底部に低く短い断面三角形状の高台を付す。また、内面には暗紋を施す。

16は、土師器皿である。丸味のある底部から緩やかに開く体部を呈し、僅かに外反する口縁部を持つ。口縁端部は細身に収める。完形だが、全体に歪んだ形状である。

17は、瓦器碗の底部である。僅かに丸味のある底部に低く短い断面三角形状の高台を付す。

18は、土師器鍋の口縁部である。「く」字状の屈曲から直線的に短く開く口縁部を持つ。口縁端部は外面に張り出しを持つ。

19は、土師器碗である。平底から直線的に開く体部を呈し、口縁端部は丸く収める。また、底部外面には糸切り痕が残る。

20は、土師器杯である。平底から段を持ってやや外反する体部で、口縁端部は丸く収める。残存率が低いと高杯の可能性も考えられるが、判然としない。

21は、瓦器碗の底部である。僅かに丸味のある底部に低く短い断面三角形状の高台を付す。外内面は剥離のため胎土が露出している。

22は、瓦器碗の底部で、平底から緩やかに立ち上がる体部で、やや外反気味に短く開く断面「コ」字状の高台を付す。また、内面には暗紋を施す。

23は、須恵器鉢の体部で、所謂東磨系須恵器の鉢である。直線的に開く体部に外面に三角形状に張り出した口縁部を持つ。

24は、須恵器鍋の口縁部である。「く」字状の屈曲から直線的に短く開く口縁部を持つ。口縁端部は外面に張り出しを持つ。残存する体部外面には、横方向のタタキが残る。

25は、瓦器碗である。僅かに内湾しながら緩やかに立ち上がる体部を呈し、僅かに外反する口縁部を持つ。口縁端部は、細身に収める。底部付近には、僅かながら断面三角形状の高台を付す。

26は、青磁輪花碗である。緩やかに直線的に開く体部を呈し、やや段を持って立ち上がる口縁部を持つ。口縁端部は丸く収める。また、口縁端部は内側に折り込んで、輪花を表現している。断面三角形状の高台は畳付きで露胎している。

27は、瓦器碗の底部である。丸味のある底部に低く短い断面三角形状の高台を付す。

2 石器 (図版8 写真図版 12)

【楔形石器】

S1は、緑灰色を呈するチャートを用いた楔形石器である。縦長剥片を素材としており、図裏面中央に、その主要剥離面をとどめる。背面側の剥離痕のうち、図中央と左側は、主要剥離面と同一方向からの剥離であることから、素材の剥離にあたっては、縦長剥片の連続剥離が行われたと考えられる。

表裏とも、上下両端に対向する剥離痕が見られ、端部に弱いながら潰れが認められることから、楔形石器と判断した。

器表面は全体に摩耗して、稜線や凸部が平滑であることから、原位置を遊離して転磨を受けた資料と考えられる。長さ45.0mm、幅18.5mm、厚さ10.3mm、重量9.3g。

【叩き石】

S2は、硬質の火成岩礫を用いた叩き石である。長石・細粒の石英結晶を多く含み、角閃石を含む。ほぼ拳大の円磨された礫を用い、その側面を敲打して整形しているほか、表裏両面の中央を敲打して、2か所の凹みを形成している。上下両端面には、打撃による顕著な潰れが認められる。いわゆる「凹み石」に属する資料である。長さ9.3cm、幅7.6cm、厚さ4.9cm、重量576.3g。

2 鉄滓 (写真図版 12)

鉄滓 (M1) は、包含層掘削時に出土した。小片であり、規模は長さ3.37cm×幅2.85cm、厚さ1.89cm、重量は34.0gである。

第4章 まとめ

以上、当該発掘調査における遺構及び遺物について述べた。遺構は、柱穴と想定されるピットは、調査区西半部を中心として、やや南北のラインを意識した方向性を持って検出され、明確に建物として復元には至らなかったが、何らかの建物が存在する事は、間違いのないであろう。また、調査区東半部で検出した、小溝を伴う池状遺構 (SX01) は、調査区より南側に広がる現在の藤坂集落の下に、遺跡と同時期の集落が広がっている事を想定すれば、段丘上最も低い場所に当たる当該調査地区の立地から、山側の集落からの集排水を兼ねた遺構という推測もできる。従って、当該調査地区は、同時期集落跡にあって、その末端に当たる部分であると想定される。

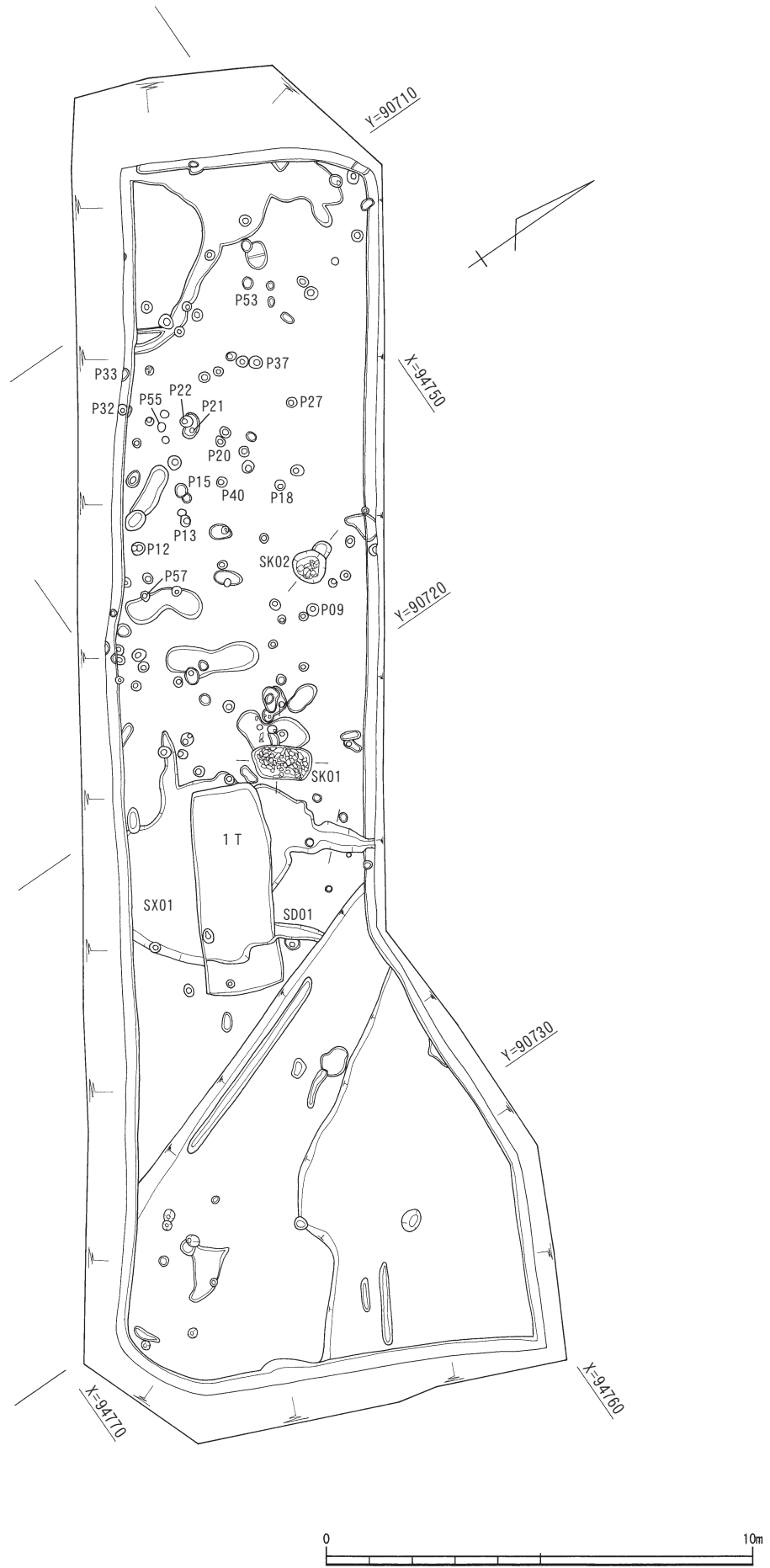
出土遺物では、瓦器椀、土師器鍋、土師器皿、須恵器碗等に混じって、青磁碗等の輸入陶磁器や東播系須恵鉢が出土する等、谷間の狭小な集落跡ながら、その流通の一端が看取される。それは、やはり多紀郡北部の交通の要衝であった藤坂の地における集落形成時期とその特徴を物語るものと言える。また、嘉元3年 (1305) の撰録渡庄目録 (九条家文書) において九条家氏院領として「藤坂庄」が認められることから、遺跡内から出土した12世紀代及び14世紀代の遺物は、中世における山間部開発状況の一端を示すと共に、史料の記述内容を補完する資料と言える。

その他、出土した楔形石器や叩き石等の縄文時代の遺物は、確実に遺構に伴うものではなかったが、当該地周辺における未周知の人々の営みの歴史を想像せずにはいられない、興味深い資料と言えよう。

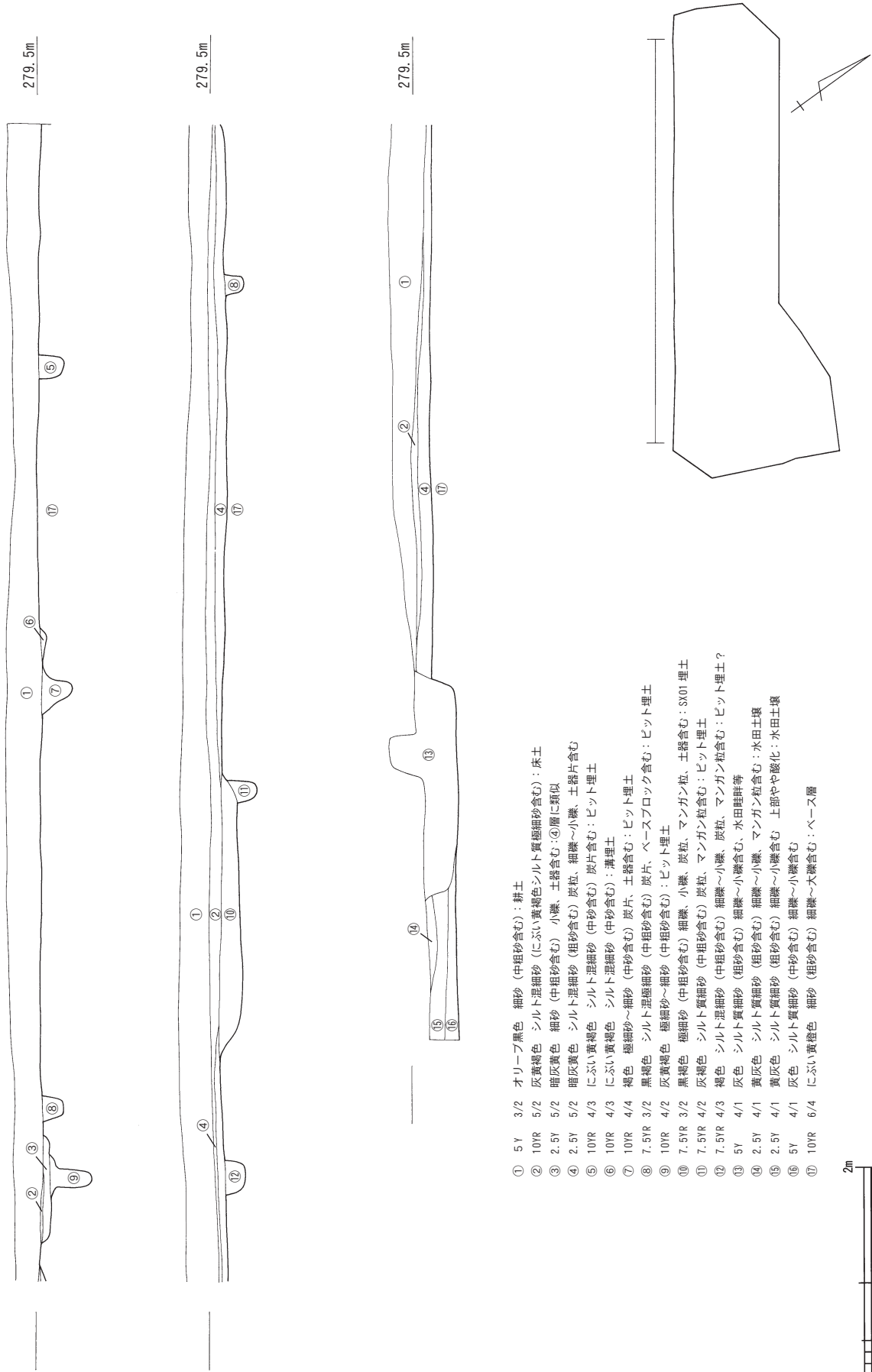
表1 出土遺物観察表

報告 番号	図版 番号	写真図 版番号	種別	器種	法量 (cm)							出土 遺構等	
					口径	器高	底径	長さ	幅	厚み	重量		
1	7	10	瓦質土器	羽釜	(25.2)	7.5+ α							1T
2	7	10	瓦質土器	鉢 羽釜?		6.8+ α							1T
3	7	10	土師器	椀	(11.0)	2.7+ α							P09
4	7	10	瓦器	椀		1.8+ α	6.3						P09
5	7	10	瓦器	椀		4.9+ α	6.5						P12
6	7	10	瓦器	椀	(14.0)	4.4+ α							P13
7	7	9	土師器	小皿	8.3	1.3							P15
8	7	10	土師器	椀		1.5+ α	7.0						P18
9	7	10	瓦器	椀	(13.0)	2.6+ α							P20
10	7	10	須恵器	鍋	23.0	6.8+ α							P20
11	7	9	土師器	小皿	8.25	1.4							P21
12	7	11	土師器	皿	11.0	1.85							P22
13	7	11	須恵器	小皿	8.0	0.7	6.0						P22
14	7	11	瓦器	椀	12.0	3.45+ α							P27
15	7	11	瓦器	椀		2.1+ α	5.0						P32
16	7	9	土師器	皿	10.0	2.4							P33
17	7	11	瓦器	椀		1.7+ α	5.0						P37
18	7	11	土師器	鍋	(26.0)	3.9+ α							P40
19	7	9	土師器	椀	16.0	4.9	8.0						P53
20	7	11	土師器	杯 高杯?	(11.6)	2.4+ α							P55
21	7	11	瓦器	椀		1.3+ α	5.5						P57
22	7	9	瓦器	椀		1.7+ α	4.6						SK02
23	7	11	須恵器	鉢	(34.0)	8.9+ α							SX01
24	7	11	須恵器	鍋	(22.0)	4.3+ α							SX01
25	7	11	瓦器	椀	(12.0)	4.3+ α							SX01
26	7	11	青磁	輪花碗	(10.4)	3.9	(6.4)						SX01
27	7	10	瓦器	椀		1.2+ α	5.2						包含層
S1	8	12	石器	楔形石器				45.0mm	18.5mm	10.3mm	9.3g		包含層
S2	8	12	石製品	叩き石				93.0mm	76.0mm	48.5mm	576.3g		P12

圖 版

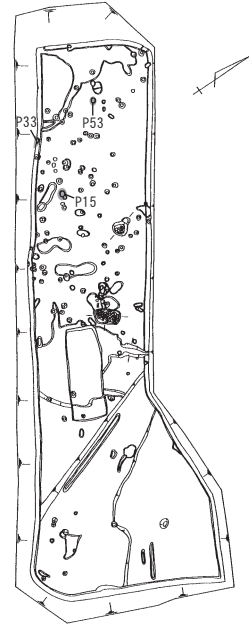
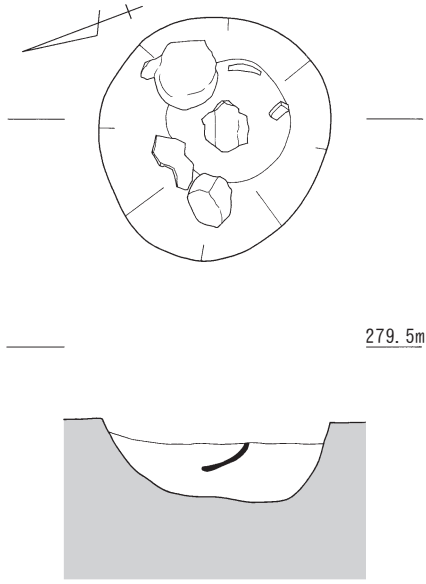


遺構平面図

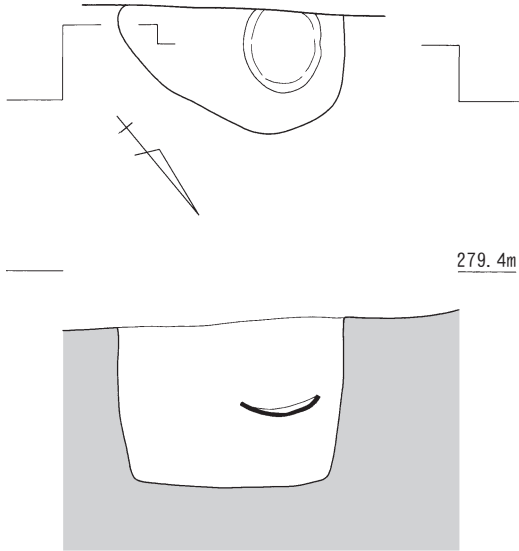


調査区南壁断面図

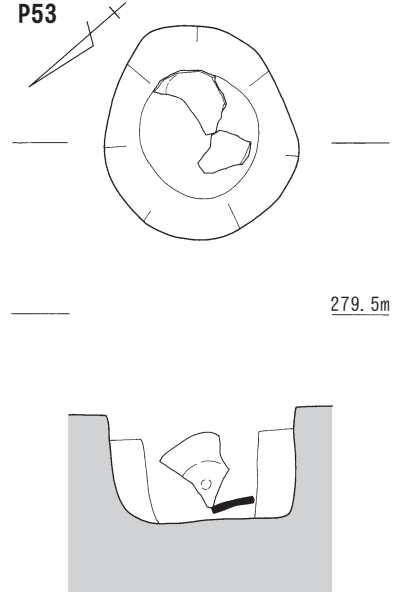
P15



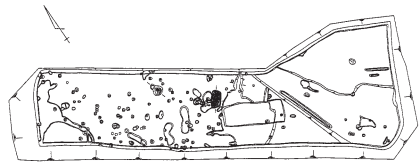
P33



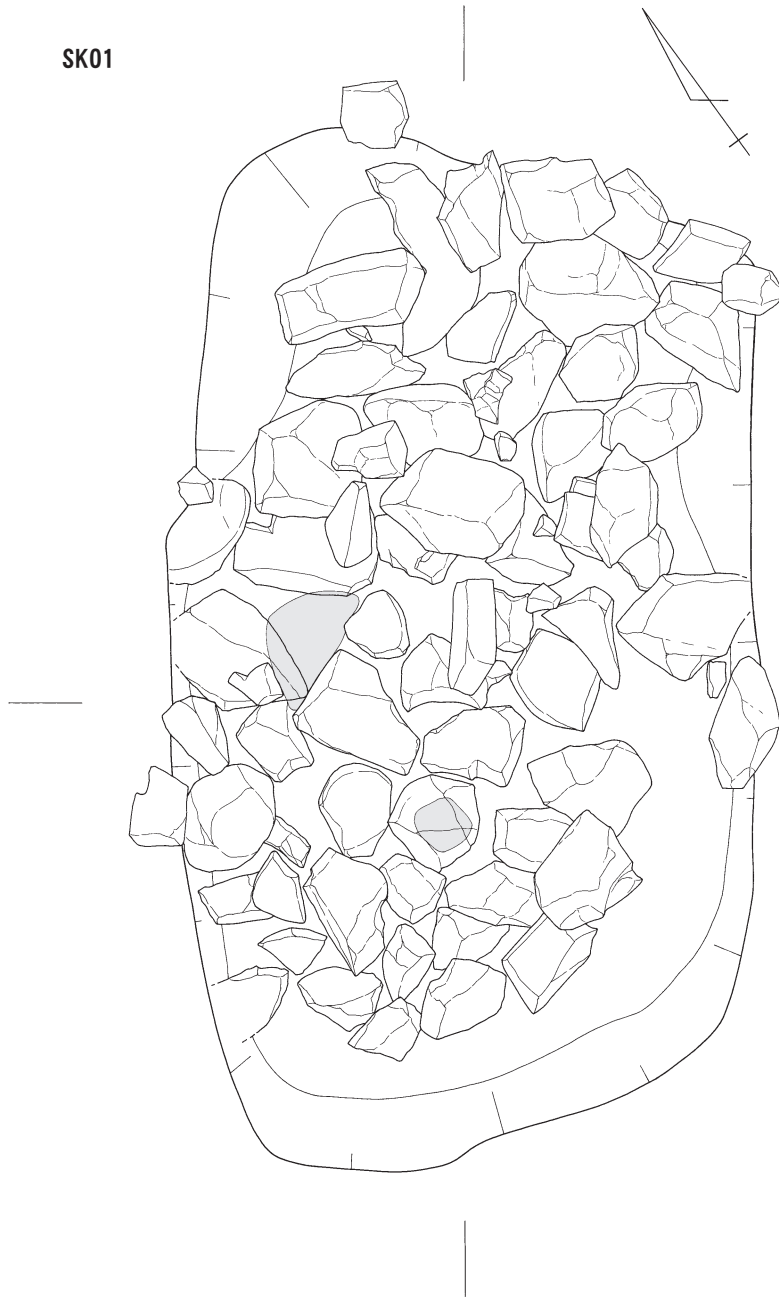
P53



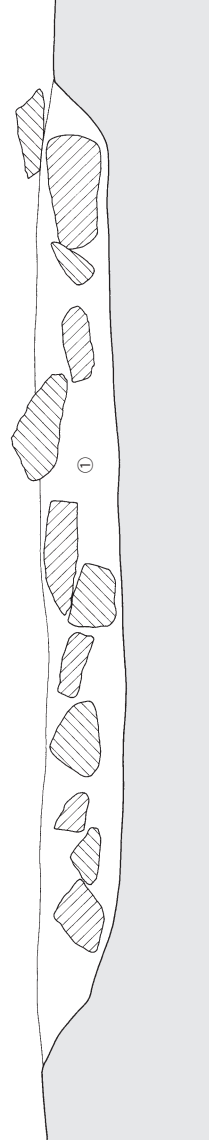
P15 · P33 · P53 平面图 · 断面图



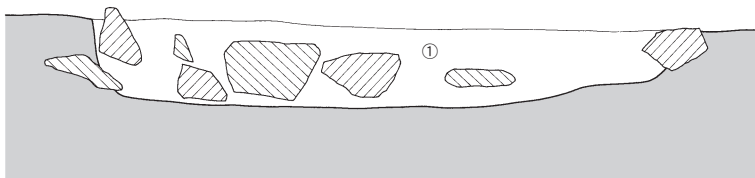
SK01



279.5m



279.5m

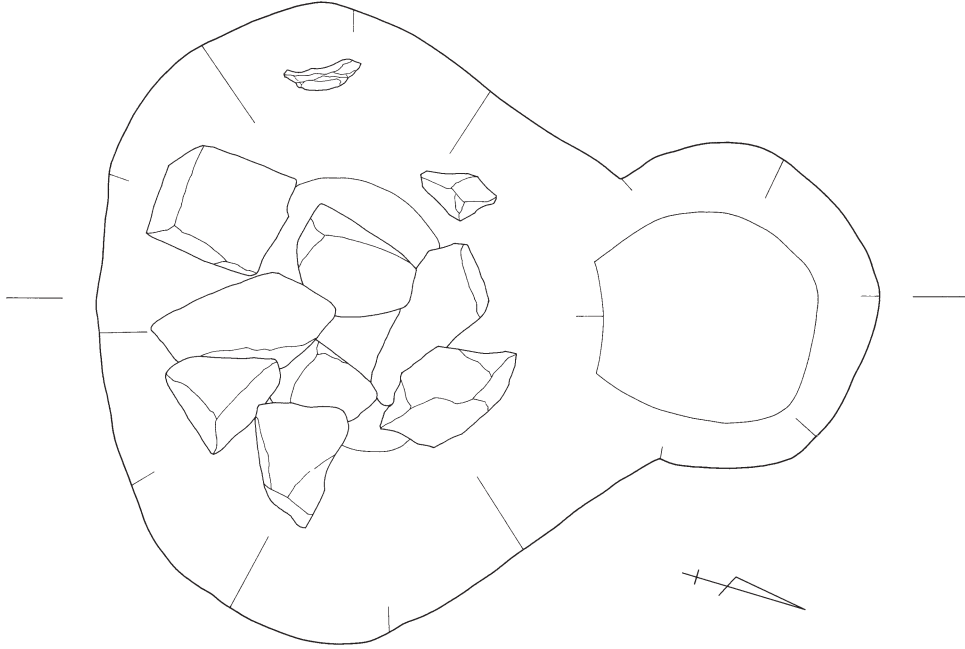
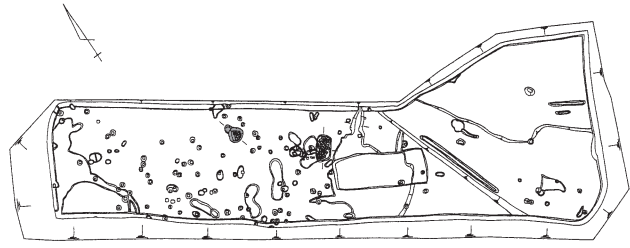


① 2.5Y 4/2 暗灰黄色 極細砂 (粗砂～小礫含む)

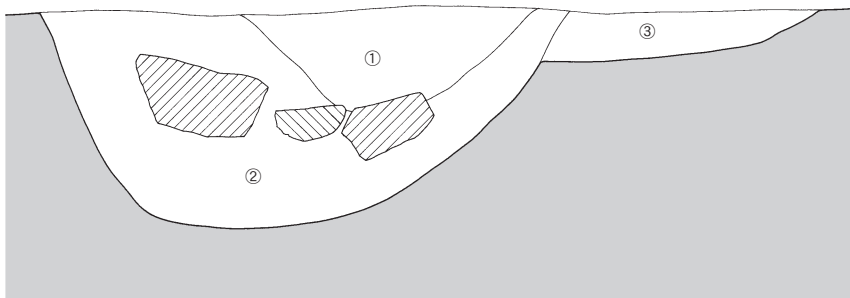


SK01 平面図・断面図

SK02



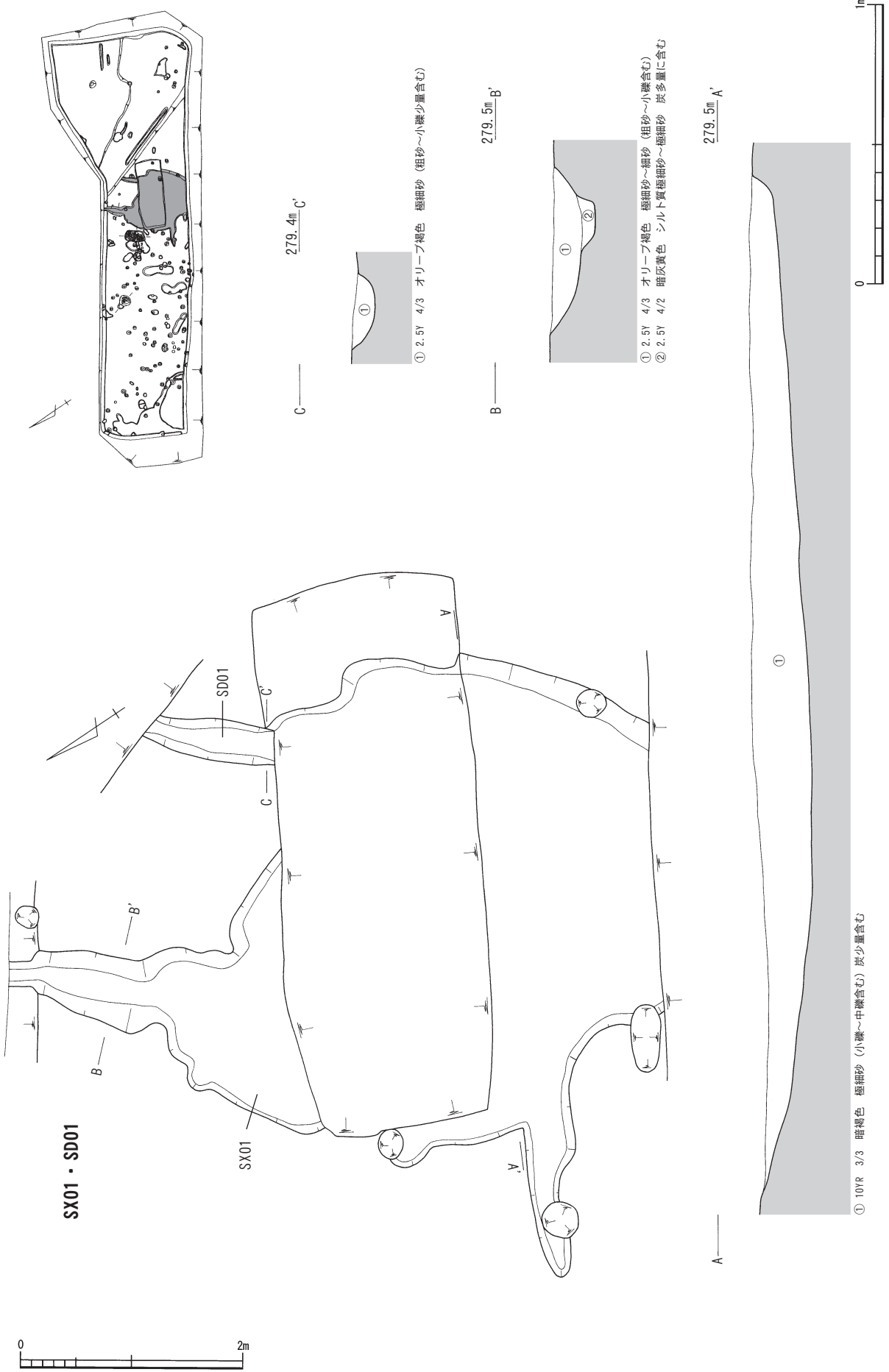
279.5m



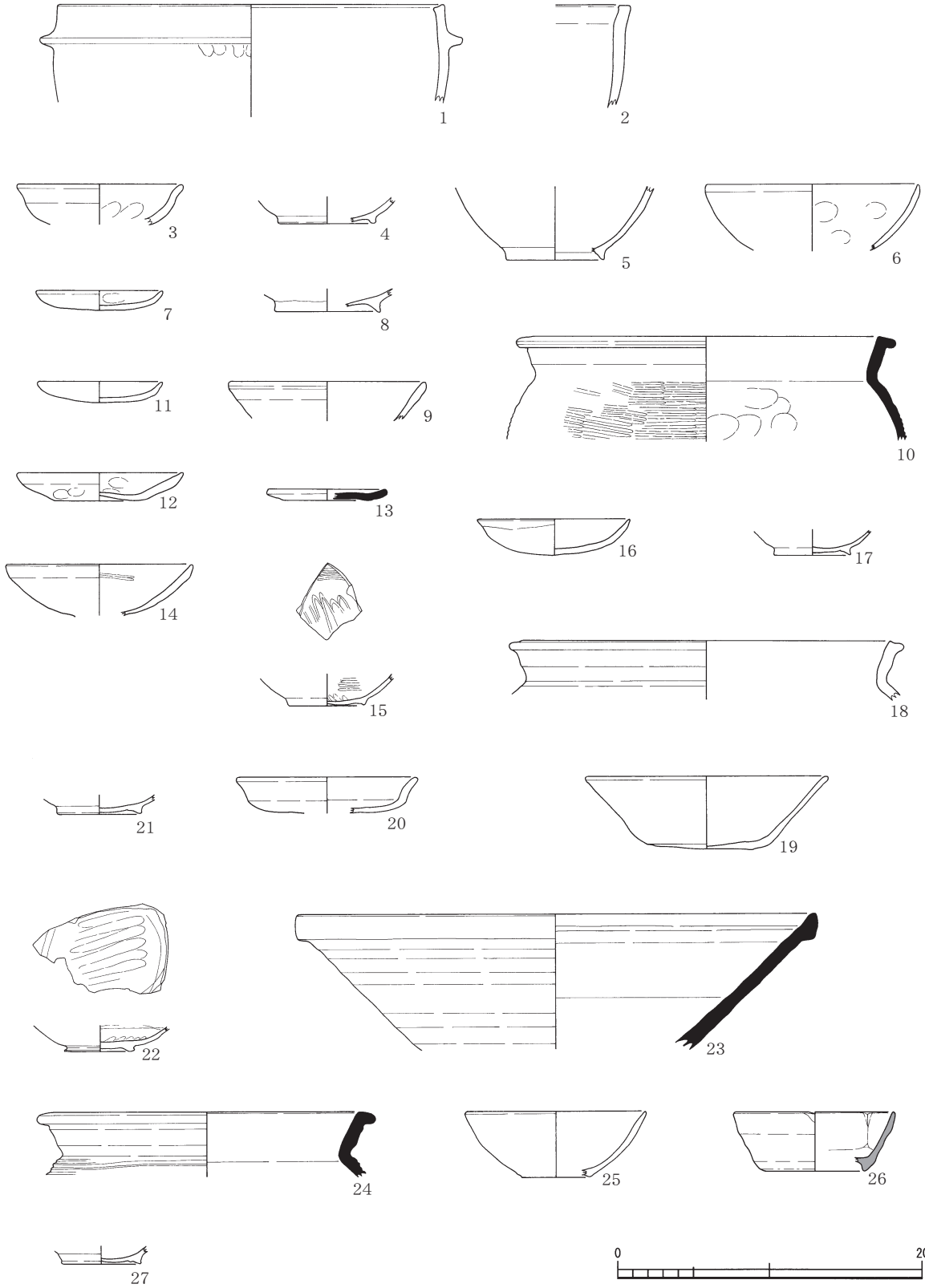
- ① 2.5Y 5/2 暗灰黄色 極細砂 (小礫・中礫多く含む)
- ② 2.5Y 4/2 暗灰黄色 極細砂 (小礫少量含む)
- ③ 2.5Y 5/3 黄褐色 シルト質極細砂～極細砂



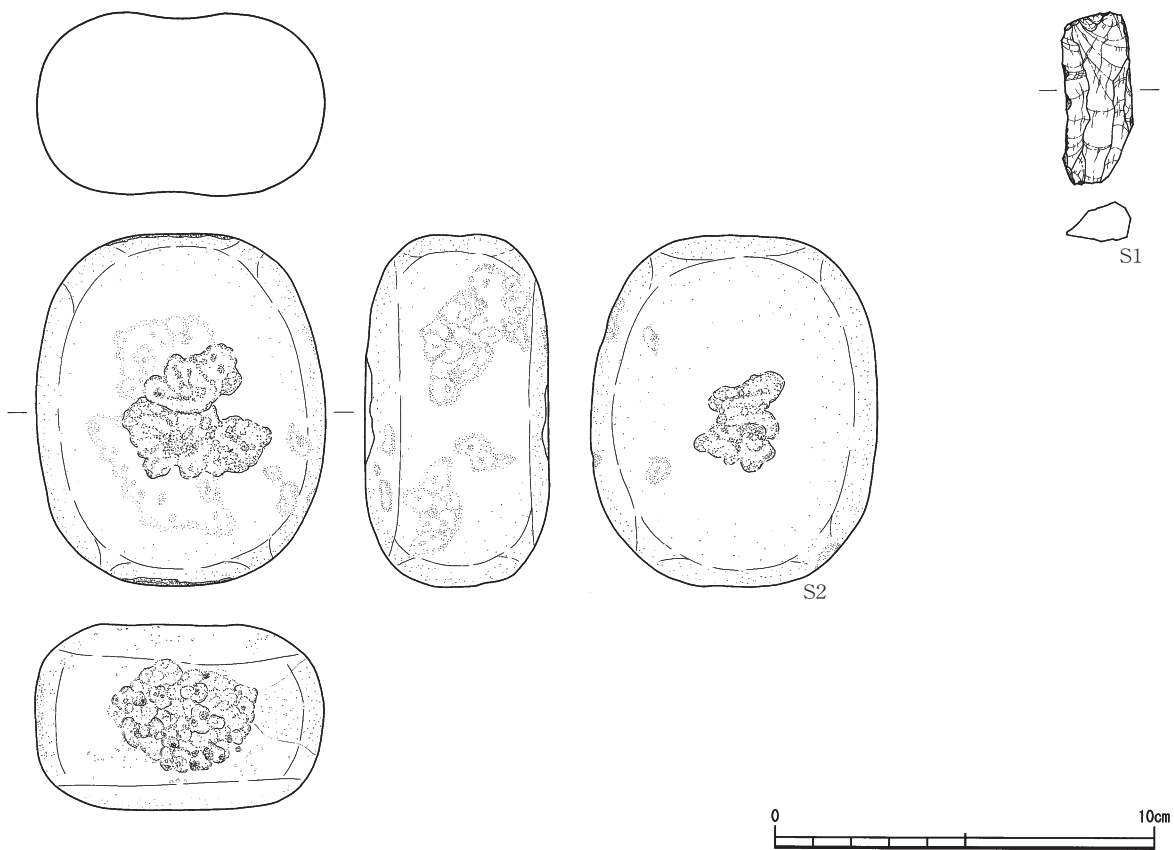
SK02 平面図・断面図



SX01・SD01 平面図・断面図



出土土器



写真図版



調査前状況（西から）



機械掘削状況（東から）



作業状況①



作業状況②



調査区全景（西から）



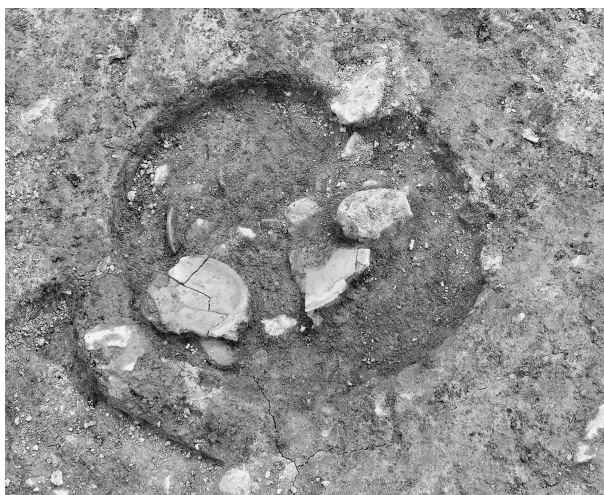
調査区全景（東から）



調査区西半部柱穴群（東から）



調査区南壁断面（北西から）



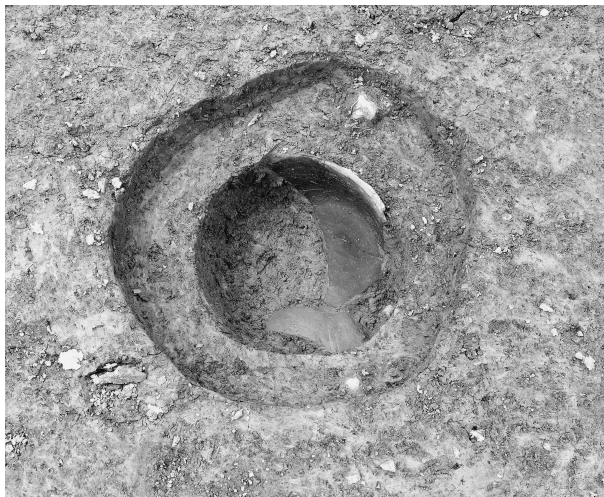
P15 遺物出土状況（北から）



P15 断面（北から）



P33 遺物出土状況（北から）



P53 遺物出土状況（東から）



P53 断ち割り断面（南から）



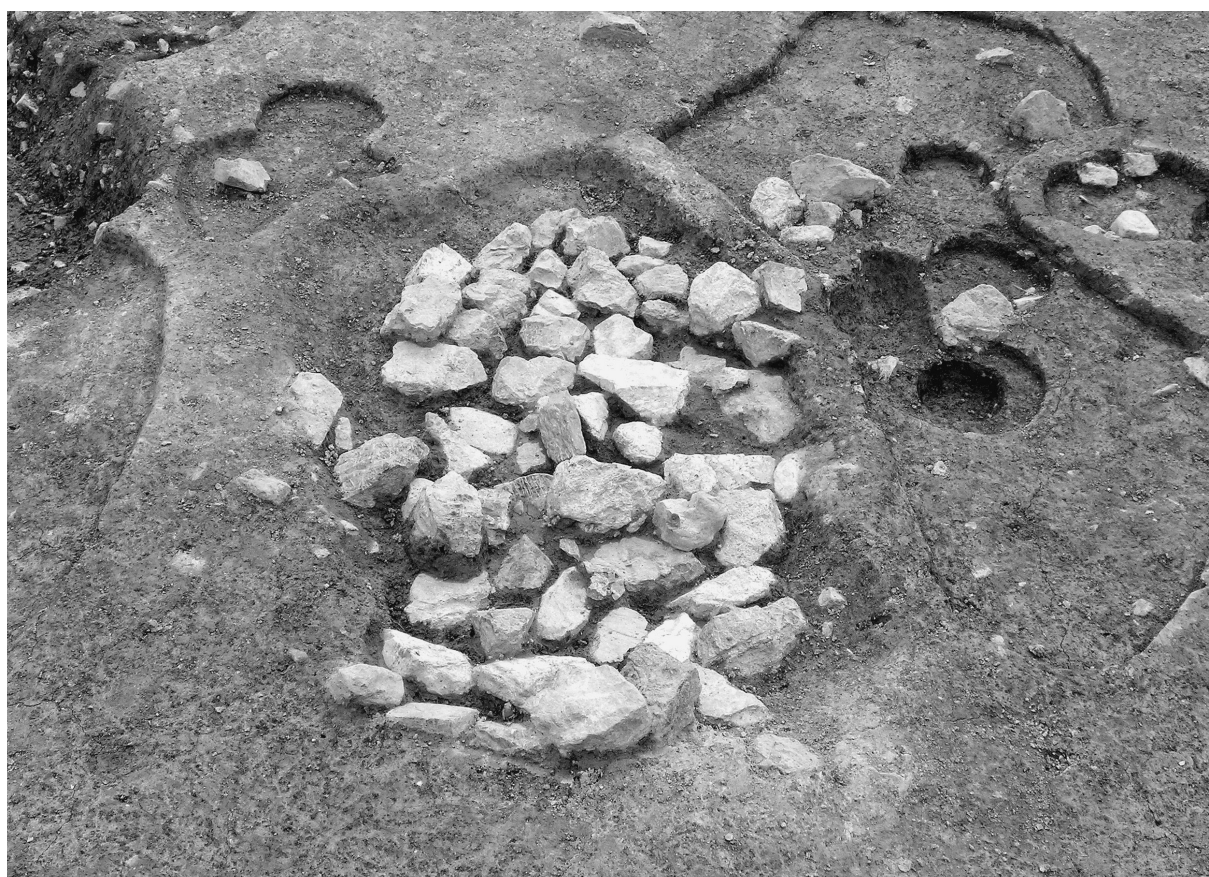
上：SK02（北から）

左：SK02 遺物出土状況（北から）





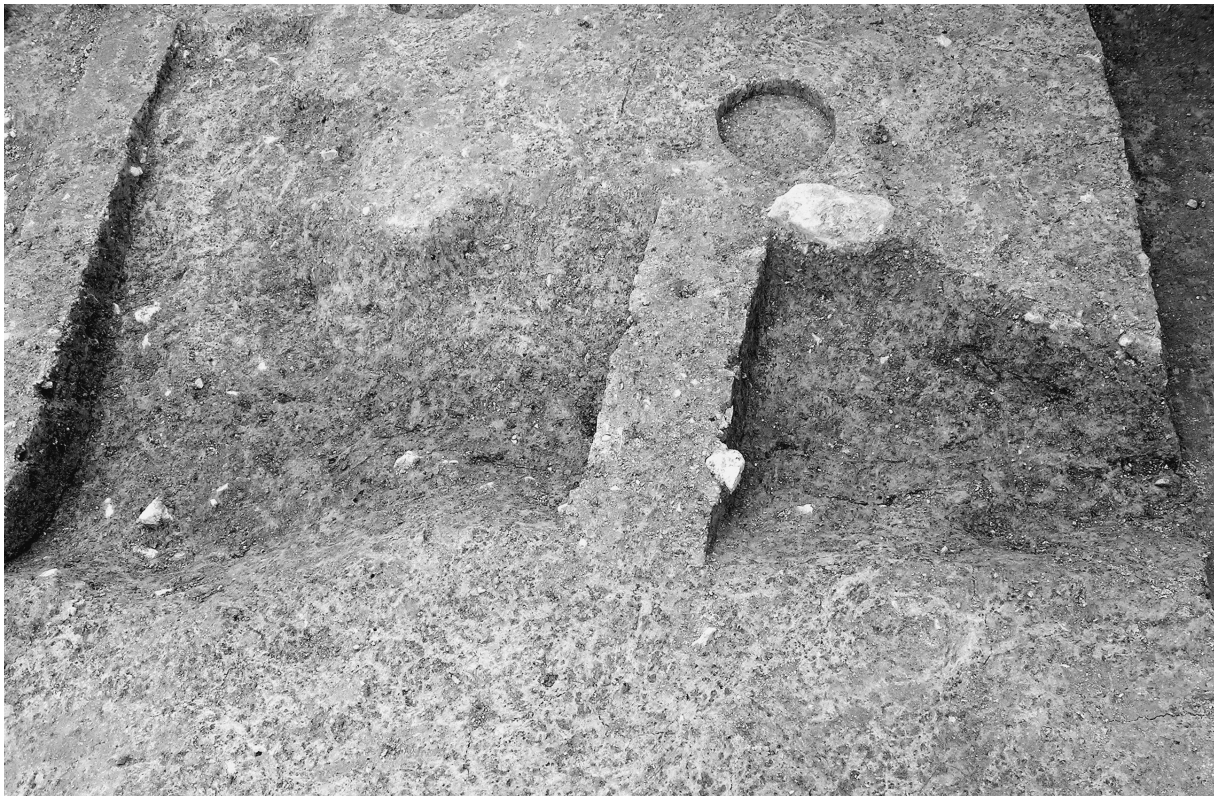
SK01 (南から)



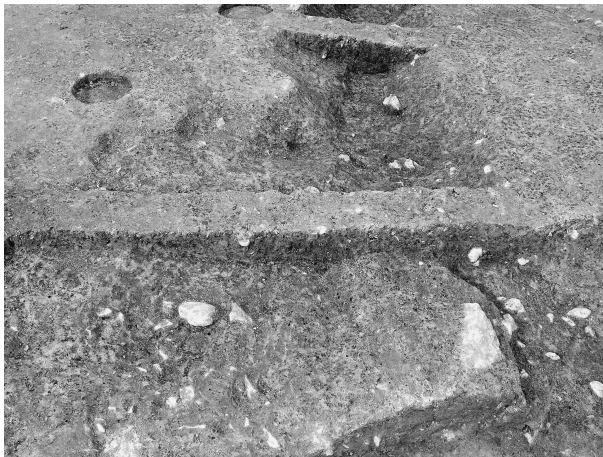
SK01 (北から)



左：SD01 畦 (C-C') 断面 (南から)



SX01 北溝 炭検出状況 (東から)



SX01 北溝南畦断面 (南から)



SX01 北溝北畦 (B-B') 断面 (南から)



SX01 畦 (A - A') 断面 (北から)



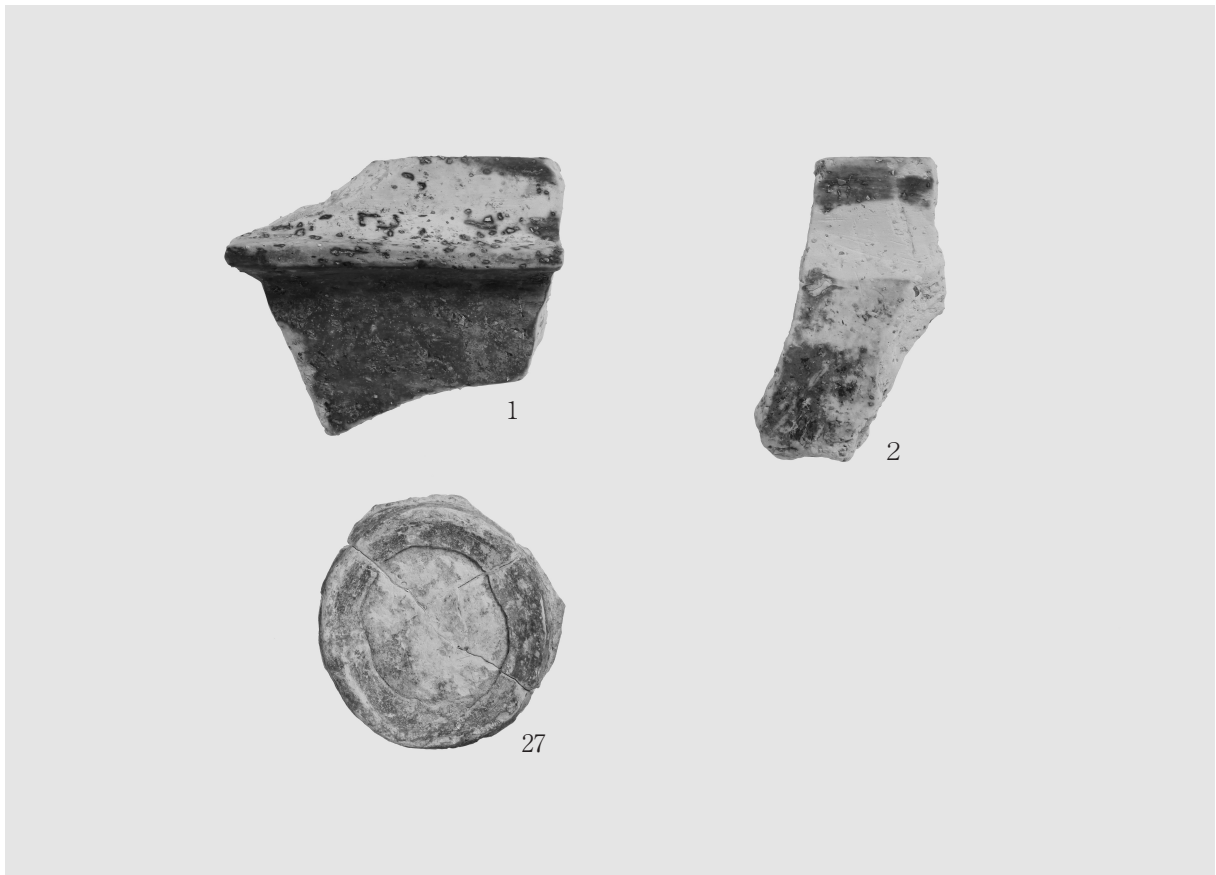
SX01 (北から)



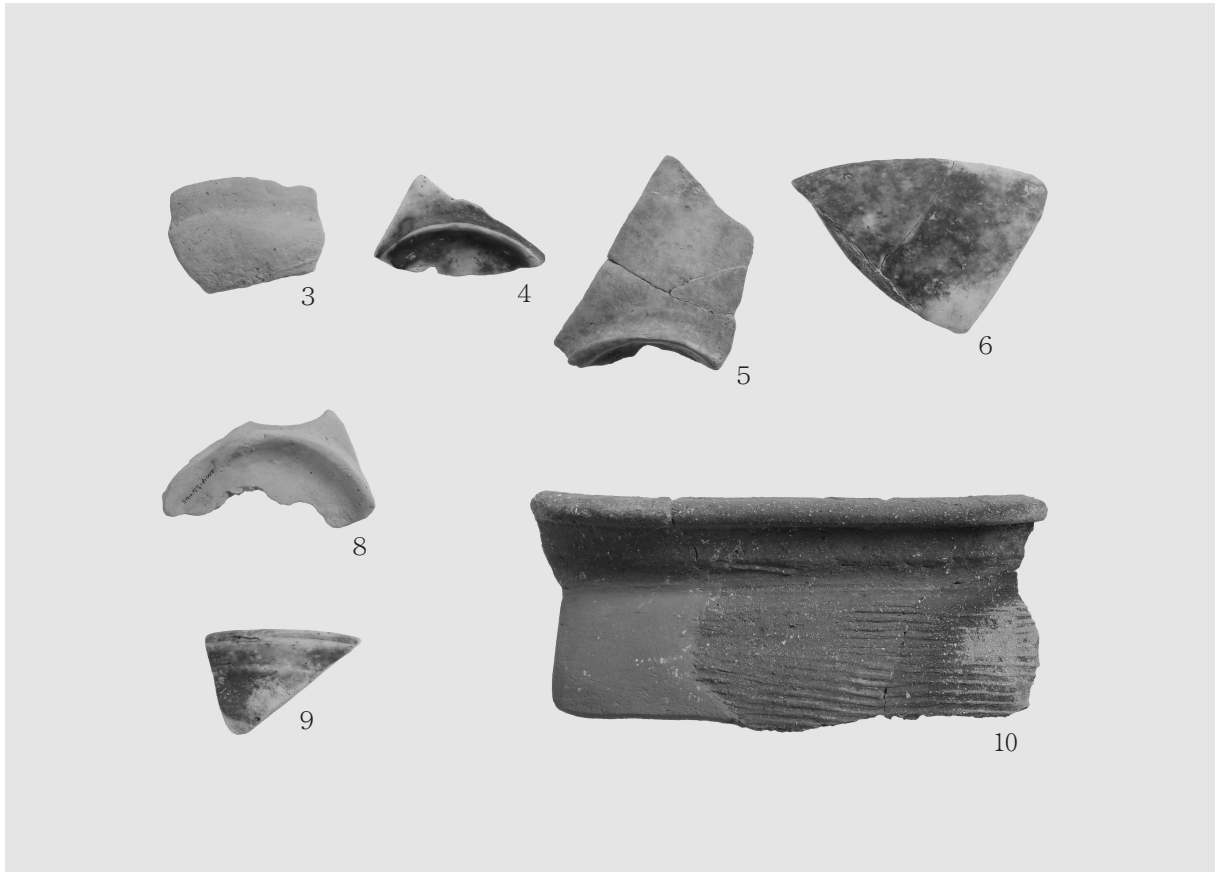
地元説明会状況（2004年8月3日）



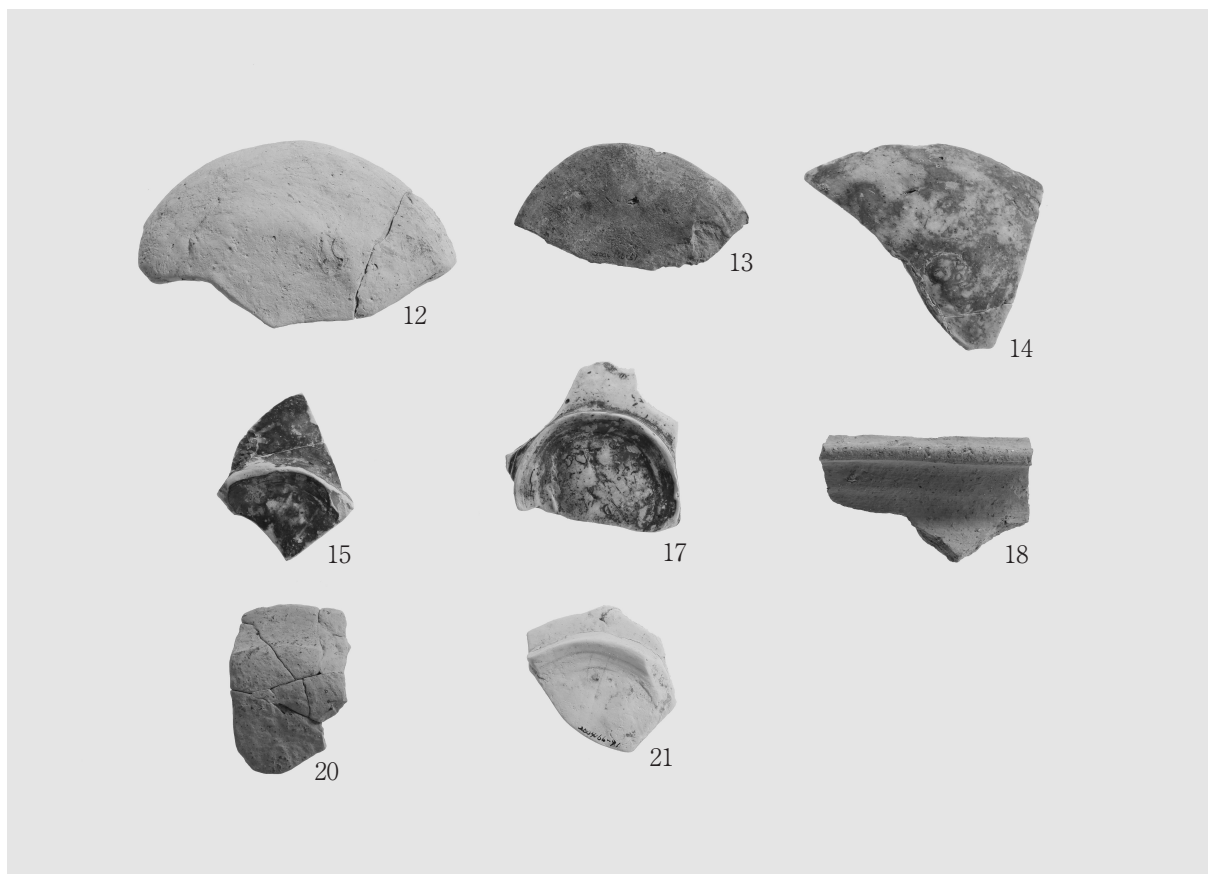
出土土器①



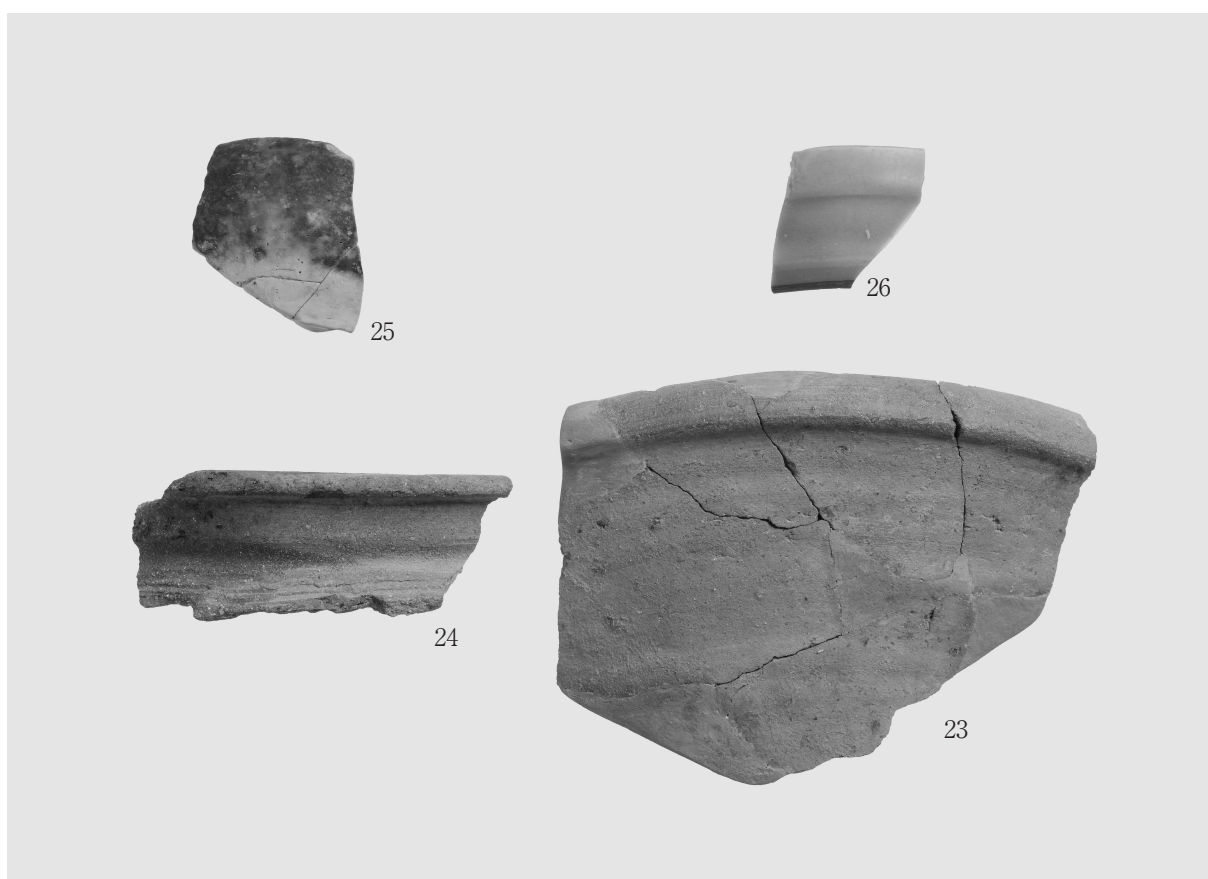
出土土器②



出土土器③



出土土器④



出土土器⑤



出土石器①



出土鉄滓①

報告書抄録

ふりがな	ふじさかばいせき							
書名	藤坂馬場遺跡							
副書名	一般県道本郷藤坂線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第446冊							
編著者名	深江英憲							
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部							
所在地	〒675-0142 <small>ひょうごけん か こくなんはり まちようおおなか ちようめ ほん ごと</small> 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 (兵庫県立考古博物館内) TEL 079-437-5561							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 <small>ひょうごけんこうべ しちゆうおうくしもやまでどおり ちようめ ほん ごと</small> 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 TEL 078 - 362 - 3784							
発行年月日	平成25(2013)年3月28日							
資料保管機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 <small>ひょうごけん か こくなんはり まちようおおなか ちようめ ほん ごと</small> 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 TEL 079-437-5589							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間 (遺跡調査番号)	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふじさかばいせき 藤坂馬場遺跡	<small>ひょうごけんささやまし</small> 兵庫県篠山市 <small>ふじさか</small> 藤坂	28221	820923	35° 8' 30"	135° 19' 44"	20040707 ~20040810 (2004166)	246㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
藤坂馬場遺跡	集落	鎌倉時代	柱穴、土坑、溝、不定形土坑	土師器、須恵器、瓦器				
		縄文時代		叩き石、楔形石器				
要約	藤坂馬場遺跡は、篠山市北東部に位置し、篠山川の支流である藤坂川によって開析された山間部に立地する。検出遺構及び出土遺物から中世の集落遺跡と判断され、遺構はピット・土坑・溝・池状遺構と考えられる不定形土坑等を検出し、出土遺物は、土師器皿・椀・鍋、須恵器椀・鉢、瓦器椀、青磁等が出土した。史料に見える九条家領の「藤坂庄」にあたるものと考えられる。当該地周辺は、地元においても鎌倉初期に関東武士の入植が伝えられており、当該調査の成果は、山間部における中世の開発状況を具体的に示すものと考えられる。							

兵庫県文化財調査報告 第446冊

篠山市

藤坂馬場遺跡

一般県道本郷藤坂線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成25（2013）年3月28日 発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号

（兵庫県立考古博物館内）

発行：兵庫県教育委員会

〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷：株式会社 ソーエイ

〒673-0898 兵庫県明石市樽屋町6-6
